

総評解散後の労働組合と社会党

——橋村良夫氏に聞く（下）



——今日のお話は特に後半部分、激動の時代でいろいろな複雑な動きがあったところですが、特に労働戦線統一以降、単産委員長から労働組合と政治とのかかわりでその前面に立っていろいろ活動されましたが、その時期についてご意見なりご質問をお願いします。

社民（民主）・リベラル新党構想

——民主・リベラル新党構想について2点伺います。1点目は、民主・リベラル新党構想があったころは同時代的にその頃の動きは見ていましたが、当時は社民・リベラル新党という言葉と、民主・リベラル新党という言葉がありました。私は個人的には村山富市さん（1924年～、1994～1996年内閣総理大臣）を支持するグループが社民・リベラル、久保亘さん（1929～2003年、大蔵大臣等を歴任）を支持するグループが民主・リベラルと言っていたと思っていましたが、今日の資料を見ると民主・リベラル新党というふうに最初から書いてあります。社民・リベラルの「社民」はどうして消えてしまったのか。どうして民主・リベラルになってしまったのかというのが1点目です。

2点目は、民主・リベラル新党をつくるという時、当時の政治状況からすると、民社党はもう新進党をつくっているわけですから、社会党

が組める相手は新党さきがけしかないと思います。しかし一方で、さきがけのほうは社会党と一緒にすることに対してアレルギーが強い。そういう中で民主・リベラル新党をつくれるという見通しがあったのかどうか。この2点について伺います。

橋村 組合の関係では社民・リベラルという表現は使っていなかったです。もし使っていたとしたら、党のほうでそういう使い方をして出るかもしれませんが。正式な文書として出されたのは先ほど資料として見ていただいたものですが、整理されたものとしてはあれが組合内における正式な呼称でした。

どういうところと組むのかというのは、それぞれの単産によっても全然違います。ただ、自民党でもない、非自民という関係でしたから。連合の中にもこういう時代なので新しいものを求めたほうがいいのではないかという動きが出てきたので、思惑としてはそれぞれみんな持っていたみたいですが、具体的にどういう組み合わせになるのかということについては論議していません。個別にはグループがあそことここと、というふうなことを言っているかもしれませんが、そういうのはなかったです。

伊藤茂さん（1928年～、衆議院議員、細川連立内閣で運輸大臣）などはイタリアの「オリー

本稿は、2014年7月20日（日）に開催された、第14回社会党・総評史研究会の記録である。読者の便宜を考慮し、適宜中見出しをつけた。また、前半の証言部分（前号）と、質疑応答（今号）に分けた。（木下 真志）

ブの木」(1996年にイタリア政界で生まれた「中道左派連合」の呼称) みたいな発想を持っていましたし、横路孝弘さん(1941年～、北海道知事、衆議院議長等)は「ブドウの房」みたいな、地域からできてくる市民運動のようなものを結集する形で新しい政治勢力をつくってみたいかどうかと。だから、既存政党をどう組み合わせるかというより、新しい芽をどうやって育て、新しい政治勢力をつくっていかうかというふうな理想論みたいな話のほうが多くて、現実論的にどこどこが集まればいいんじゃないかというふうな話は組合内部としてはなかったです。

党の中の動きとして、村山さんはいろいろな意味で武村正義さん(1934年～、1993年新党さきがけを結成。細川内閣で官房長官、村山内閣で大蔵大臣)との関係をしっかりしていきたいというのがあったようですが、横路さんと話した時には、さきがけの中でも武村さんは新しい民主党の中には入れないというような動きでした。そんな動きもあったせいでしょう、村山さんと久保さんは後から入ってきてもらうというような表現の仕方を使ってみましたけれど、結果としてはどちらもだめでした。

政党との政策協議

——社会党との連帯とか社民党との連帯とか、組織の移り変わりはよくわかりますが、一つわかりにくかったのはそれぞれの連帯の、そのプロセスでどういう政策協議があったのか。もう少し具体的にこういう政策について社会党と合意を得たとか、政策についての資料集のようなものがあったら教えていただきたい。それと、具体的にどういうお話があったのか、もしご記憶にあれば教えていただきたいと思います。

橋村 党と労働組合の関係で政策的に合意というのはあまりなかったというふうに記憶しています。ただ、個別の課題として、民営化の問

題が出てきた時には民営化反対とか何とかというのは党を通して政治のほうに反映してもらった。そのようなことをやったというのはありましたが、党として合意というのは……。こちらとしてもあるべき論みたいなことは、こういう政策をやるべきだといったことにはあまり首を突っ込むべきでないと考えていましたから、それについては……。総評時代はどうだったか、センター時代はどうだったか、よくわかりませんが、特にしてない。記憶にないです。こういうことでは政策合意しているというふうなことは何かあったかな。

北岡 少なくとも党との間の政策合意という形はなかったと思います。

——そうなりますと一つ疑問なのは、97年ですと金属機械労組に在職したまま社会党とか社民党との連携を模索するわけですが、連携する目的がよくわからないのです。もともと組合に身を置いたまま社会党と強く連帯して何を目指したのでしょうか。

橋村 難しいな、どういう表現をしたらいいんだろう。民間単産のグループでいくと、政党との関係というより政党ならびに議員との関係みたいなものが強くて、民間で起きた倒産の問題とか、あるいはいろいろな法案の言っていることとやっていることが現実で違っている部分とか、そういうものを党を通して国会で質問をしてもらったり、そんなことを一つの目的としていました。

同時に、税金とか社会保障の問題になりますと、個別の経営との関係では解決できる問題ではありません。そういう点で党を通じて、我々としてはこんなふうに考えているけれど、どうなんだろうか。あるいは、こういうことについて頑張って反対ならば反対してもらいたい。こういうところは修正ならば修正してもらいたい。このようなことを党として言っているとい

うふうなことが具体的には多かったと理解しています。私の金属機械の関係でいけば、倒産が結構多かったものですから、倒産関係の処理の問題とか、あるいは下請け振興法の問題とか、中小企業の問題とかの法案づくりについては、議員を通していろいろお願いしたというような経過になってます。

総評加盟の経緯

——先ほどのお話で、これは一般的なことで皆さんも理解されていると思いますが、総評だと官公労のほうで圧倒的に多いわけですね。シチズンが民間労組でありながら同盟を支援しないというのは、どういう経緯でそうなっているのでしょうか。

橋村 それぞれの単組の歴史的な経過があるようです。私が入った時にはもう総評全金（全国金属労働組合）の構成組織だったものですから、そのままという形です。先ほど山花さんの話を、貞夫さんではなくて秀雄さんの話でも西部地協の関係でお話しましたが、党としても戦後の労働運動の復興と言いますか、振興に向けて、昔からの活動家がある程度分野を決めるような形で、あなたは金属関係の分野の面倒を見てやってくれというふうな動きがありました。それと同時に、総評の前の産別（全日本産業別労働組合会議）とそっちの関係が、終戦直後はそれぞれオルグが各単組に入ったようです。そういう関係でシチズンの私たちの先輩は総評全金がいいんじゃないかと選択したようです。その後、私の先輩の高山というのが全金の委員長をしていた関係もありまして、ずっとそういう関係です。

だけど、先ほどの業種別共闘などは本籍地ではなくて、現住所で付き合いおうということになっていましたから、今はエプソンだったり、セイコーとか、いわゆる第2セイコーは全金同

盟ですし、リコーも全金同盟。ジェコーも全金同盟。オリエントも全金同盟。本籍ではなくて現住所で付き合いおうということで、時計産業における労使関係のあり方みたいな情報交換はしていました。このような関係はそれ以前からありましたね。ですから、どう選択したかというのは、それぞれの持つ単組の歴史みたいな中で決まったのではないのでしょうか。

——中小企業が多いといったことはあまり関係ないですか。傘下組合の企業規模の問題は？

橋村 中小企業が多いですね。産別会議の時に金属グループというのがあって、その金属グループの中から鉄とか自動車とか電機は業種共闘みたいな形で独立していくというふうだったものですから、残ったのは中小が多かった。だから、JC（IMF-JC、全日本金属産業労働組合協議会）4単産と言われる以外のところについては、全金同盟だったり、新産別全機金だったり、総評全金だったりというところに金属関係は分散されたということだろうと思います。

それと、例えばいまNTNと言われている東洋ベアリング、軸受けのベアリングをつくっている会社ですが、こういうのは工場単位ごとに労働組合ができていまして、企業として一つではなかったのです。そういうところは逆に、どこかが産別に加入していても一緒になる時に中立にしようということで中立になった。中立グループというところにはそういうところが入ってきます。機械金属労組懇談会などというのはだいたいそんなグループです。

——今の流れとすればJAM（ものづくり産業労働組合。機械・金属産業を中心とする産業別労働組合）のほうに流れている。

橋村 JAMでみんな一緒になっています。

——昔の総評全金の時はかなり戦闘的というイメージがありましたが、今そういう色彩はJAMにはどうですか、あまり受け継がれてい

ないですか。

橋村 連合という立場から見れば、そういうのが引き継がれている座別の一つではないかというふうに見ています。

——比較的よくやっているところがあるわけですね。

労線統一、シンクタンクをめぐる

——総評の中でどちらかという左に位置していた全金が、労戦統一をどう見ていたのかということをお伺いします。先ほど民と官の違いが大きいとおっしゃいましたが、87年の民間連合の発足は民の統一ということで積極的に受け止めたということなのか。あるいは、同盟にインシアチブを取られてやむを得ず一緒になっていくということだったのか。あるいは、その後の89年の官民統一は、同盟、総評の側の民間と一緒に総評の官を巻き込んでいく、呑み込んでいくというようなイメージでとらえていたのか。どういうとらえ方をされていたのかをお伺いします。

橋村 全通（全通信労働組合）の宝樹論文（1967年、宝樹文彦全通委員長が発表した〈民間先行、共産党排除〉などを内容とする労働戦線統一に関する論文）というのをご存じでしょうか。あのころから総評の中にも全的統一を目指すという動きがずっとあったようです。最初は官まで一緒にという形でやっていたようですが、それだけではどうにも動きがとれないのではないかと。それだったら民間先行でやったらどうだということで、全民労協（全日本民間労働組合協議会）という形でスタートしたのが82年です。

今日はそちらの関係の資料をあまり持っていないので記憶にないのですが、87年、総評全金が入ることになって、これからの労働運動を考えた時、それからナショナルセンター（労

働組合の全国中央組織）がどんなふうに変化していくのだろうかということを含めて検討した時、いずれ一本になっていく方向のほうが正しいのではないかと。一つの目標としていたのはドイツのDGB（ドイツ労働総同盟。ドイツ最大の労働組合組織）です。これを頭に置いて、部会運営といたらいいのでしょうか、あの中でも分かれて仕事をやっていたようですから、そういう目を見た時に、座別がなくなってしまうわけではない、ナショナルセンターが一つになっていくんだという構えていました。

波に乗り遅れるなという言い方は変ですが、そういう動きが僕らの前の時代から脈々と続いているような部分がありました。そんなことが表面化してきたのが、佐竹五三九さん（1918～1977年、総評・全金委員長、総評副議長）が書記長だったか委員長の時にいっぺん21単産会議というのをやりましたが、この時に全金同盟との関係でもめてしまったんです。金属インターの問題か何かでもめたのか記憶がありません。そんなことでこれはいっぺん御破算になってしまったのです。

その後、労働戦線統一推進会（宇佐見・塩路・中川・中林・堅山・橋本）ができて、全民労協の前の、政策推進会議が電機などを中心にできていったというのが、全民労協への一つのステップになっています。

——時代の趨勢としてある種やむを得ない。それは全的統一という一つの理想の姿に近づいていくワンステップであると。

橋村 そういう位置づけです。だからいま連合って何だったのかと。最近は何の年賀状はあんまり来なくなりましたが、やめたばかりのころは連合は何だったんだ、おまえら、何をやったんだという年賀状が昔の仲間から結構来ました。イメージとしてはちょっと違うなという感じです。

——結局、総評は同盟に呑み込まれたのではないかというところもあると思いますが、どうなんですか。

橋村 どうなんでしょう。もうちょっと歴史がたたないとわからないのではないですか。

——今の時点ではなかなか言い切れない。

橋村 ただ、官に対する政治からの圧力はものすごいものがありましたから。

——官に対しての民間労組のイニシアチブが確立するというか、そういう結果になったと見ていいですか。

橋村 先ほども言いましたように、総評時代は各産別の問題だとしても全体的な問題として取り上げようという動きが運動としてありましたが、連合はそこは明確に割り切って、産別固有の問題については産別だけで解決してくださいと。

——連合としては政策・制度でやるという話ですよね。

橋村 そうです。力と政策ですと言っています。ところが薬科満治さん（1931年～、1989年連合会長代行、参議院議員）などがだいたい主張して、胴体だけできても頭がなければだめじゃないか。手足はまだなかなか難しいというので、連合総研（連合総合生活開発研究所。日本労組史上初の本格的シンクタンク）を作ったのですが、このシンクタンクを連合が全然利用しないものですから、何のためかわからないというのが実態だと私は思っています。

——いま春闘の時のシミュレーションを出すだけですよね。

橋村 同盟時代にそういう仕事をしていた佐々木孝男さん（1923～1991年、元経済企画庁経済研究所所長）が、最初に連合総研所長に就任しました。同盟時代から白書を作って出していましたが、よく聞いてくれるのは総評系の組合で、同盟系の組合は私の話をあんまり聞

かないというような言い方をしていたと記憶しています。だから、作ったけれども、今は連合の運動に資するような研究データは出てきていないのじゃないですか。どこかの委託研究のほう为主になってしまっているような感じではないですか。

——今の話に関連して、全金同盟と全金、結構距離のある組合だったと思います。山岸章（1929年～、連合初代会長）さんのオーラルヒストリーとか伝記とか読むと、山岸さんは全金同盟のほうの藤原巖さん（全金同盟書記長・組合長等を歴任）とは非常に親しかった。かなり前から、おれがナショナルセンター、労戦統一をしてそこのトップになるんだという明確な意識を持って藤原さんなんかと付き合っていたと。そういうのをご覧になっていると思いますが、全金と全金同盟の距離がある中で、そういうものについてはどのようにご覧になっていたのでしょうか。

橋村 全金同盟にしても、全金にしても、機労会議などにしても、中堅中小です。中堅と言ったほうがいいと思います。機労会議などは新潟鉄工とか、先ほど言ったNTNとか、ヤンマーディーゼルとか、天辻とか、日立工機とか、そんなところが入ったグループですから、中堅と見てもらったほうがいいと思います。このグループはJCの賃金決定に左右されることに対する反発みたいなものが非常に大きかったです。JCが決まらなければ決まらないなんてそんなバカなことがあるか。それぞれ働いているのはJCの企業ではないのだから、JCと関係あるところは別にして、その結果もJCとはまったく違っている。違うんだから、独自で闘いをつくるべきではないかという発想がずっと出てきました。でも、機械金属共闘会議という中には全部入ったんです。業種別会議とか機労会議などもみんな入って、この辺から全金同盟と総

評全金との交流がだんだん強まってきます。

——86年ぐらいから。

橋村 ええ、この辺からずっと強まってきます。そういう中で金属機械をつくる時にも藤原巖さんのところに話しに行ったんですが、まだ早すぎると断られました。

——逆に断られた？

橋村 私が行って断られました。先ほど言った京滋地連と全機金と中連（中立労働組合連絡会議）のグループ、中立のグループということで機械金属労組会議準備会をスタートして、全的統一になる前にあれをやるのではないかとということで機械金属というのをスタートさせました。ここで連合に加入していったという経過です。

その後、代も変わってきますから、そんなことを言ったってという話です。藤原巖さんの後は江口亨さんという方がやったんですが、その時にうち（金属機械）の書記長だった嶋田一夫と、前に参議院議員をやった今泉昭さんというのが向こう（全金同盟）の書記長でして、この2人がヨーロッパへ行く機会があつていろいろ話をしてきたらしいんです。私のほうは機械金属共闘会議を通じて、全的統一になった時に中小問題はどんなふうになってしまうのだろうか。それで全国一般労働組合の松井保彦さん、全国一般労働組合の大木明石さん、この4人ぐらいでしたか、その辺といろいろ話をして、金属機械とは別にそういう関係でもう一つできないだろうかということをずっとやっていたんですが、金属機械のほうが先行する形になってしまったのです。

その後、一般同盟はU・Iゼンセンと一緒になったし、全国一般は自治労と一緒になったのかな。そのような形になったので、そちらは消えてしまいました。機械金属関係では準備会から、連合ができて2年ぐらいたってからですが、統一を話し合う会をつくりまして、連合の時と

同じで、事務所をどうするかということから始まって、こういう問題についてはどう考えるかなど、お互いに行ったり来たりして最終的には99年9月9日、JAMという形で結成されました。

「社会党を支持し強める会」をめぐる

——視点が変わって最初の質問にかかわるのですが、「連帯する会」の前に「社会党を支持し強める会」だったと思いますけれど、そことの関係というか、連続性について教えていただければと思います。

橋村 総評が解散する時、中連の関係の社会党との連携を持っているようなところ、電機などは結構持っていましたから、中連グループを含めて、総評グループと中連グループでつくったのが社会党支持労組会議だったと思います。

北岡 「強める会」はここに吸収されたのです。

——社会党と連帯する労組会議をつくった時には、いま言った「強める会」とか、そういう意味合いはかなりあつたと思いますが、総評がなくなって社会党をどうするか。その後、どんどん新しい勢力が、つくる会のほうに流れていったと思いますが、最初の目的として橋村さんはどちらを考えていたのか。「連帯する会」をつくって社会党を強化しようと思ったのか。それとも、もっと新しい勢力をつくろうという意識が強かったのか。

橋村 引き継いだ時は社会党と総評との関係を継続していく、あるいは社会党と新しい関係をつくりながら、労働組合の応援する柱をしっかりつくっていかうという感じでやっていました。党のほうも世の中の流れ、政治の流れの中で、このままではだめだということでいろいろ問題提起をしてきました。シャドーキャビネット（影の内閣。野党が将来の政権担当に備えて組織する政策立案機関）をつくってみたり、93年宣言とか95年宣言とか、新しい市民政党

に変わっていくんだといった動きを党自身もやっていました。ですから、それには同調したというか、いままでの単に総評・社会党ブロックと言われるだけではなくて、変わりつつあることについてはお互いに、脱皮しながらそういうものを目指していこうではないかという気持ちにこっちも応援団としてはなってきましたが、後段のほうになってくると社会党がそんなことはちっとも、言っただけで結果は伴わなかった。

全体の流れとしても、鳩菅（鳩山由紀夫、菅直人）新党の動きが出てきたりしたものですから、そっちへ流されていくような形になって。でも、「連帯する会」は分解するわけにいかない。そうかといって民主・リベラル労組推進会議と分断してしまったら、そっちはそっちでまただめになるわけですから、お互いにぶっ壊さないで、両方の目的が新党づくりで一緒だとすれば、名前は違っても胴体は一緒で行こうではないかというふうなことで、一時期活動はずっと進めていました。だけど結果としては、最後のほうで触れたように社会党が独自路線を取るとはつきりしてしまったわけです。

この時は6人委員会が、これがだいたい主要メンバーですから、村山さんのところに押しかけて行って、どうしてくれるんだ、この前、決めたことはこうだったのに、なぜこうなってしまふのかといろいろ話しましたが、物別れというか、平行線のままで終わってしまいました。選挙応援だけは、どこまでできるかわからないけれど、やるよということで別れちゃったのです。選挙の結果はご案内のとおりです。ですから、ここで「連帯する会」の役目は終わったなということで私と高野博司が引退したというような経過です。

「連帯する会」と政党

——「連帯する会」の中も労組によってかなり違いがあったと思いますが、全電通とか全通などとほかの組合は違いはありましたか。ここはもうちょっと社会党を守るという意識が高いとか。

橋村 それはいくつかありました。

——橋村さんの気持ちはどのあたりかなと思ひまして。

橋村 組織のトップを受けている以上、いろいろな意見は聞きますが、自分個人の意見はあまり出すわけにいかない。自分のところで解決できる問題だったらいいけれど、そうでない問題だけに、最後は会の統一性に重点を置いて対応していこうと私自身は判断して進めてきました。

例えば、これもご案内のとおりだと思いますが、山花さんが新党づくりに結構熱心でした。バックは全通と全電通だったと思います。あの日、たまたまタイミングを逸したのは阪神・淡路大震災（1995年1月17日）が起きて、そんなことをやっている時かということでそのままになってしまって、その後、山花さんも党組織を離れるような形をとりました。いま改めて先ほど言ったような本を読んだり、もういっぺん読み直したりしてみますと、我々は社会党のことなど本当にわかっていなかったんだなという感じが強いですね。

——見えていなかった？

橋村 ええ、見えていなかった。事実、ウルグアイ・ラウンド（1986～1993年、GATT〈関税貿易一般協定〉の多角的貿易交渉）の時だったか、細川政権（1993～1994年）の時だったと思いますが、コメの自由化でどれだけ入れるかという問題があった時、党本部に行っても情報がちっとも入ってこないんです。どんな話をされているのか。党の職員もNHKテレビのニュースを見ているほうが正確みたいな感じ

で、労働組合というか、少なくとも私たちが育ってきた組織とは組織感覚が全然違うところだなという印象を受けてました。こういうのを読んでみて改めてずいぶん違うなと。

それともう1点、地方組織などではヒトがつくってきた組織みたいなものがいっぱいあって、県評の中の地区労なんていうところになりますと、とりわけそういうのが強かったものですから、労働組合はおれがつくってやったんだみたいな意識の強いものが多かったですね。初めて党大会に出ていったら年寄りばかり。おれより若いのがいないような感じで、本当にこんなのでという印象も受けました。その後、ずいぶん若返ってきた気がしましたけど。うちでもその当時は衆議院議員に藤田高敏さんが出ていました。その後、筒井信隆さんを推薦したりしました。

組合から国会議員への流れ

——組合役員がある程度のところへ行ったら社会党に移る、あるいは議員になるというキャリアパスみたいなものができていたということですか。だから年寄りということですか。高齢者が多い。

橋村 そうかな（笑）。少なくとも全金の中にはそれはなかったです。

——でも、組合の場合はそういう例がかなり多いのではないですか。委員長をやめてから。

橋村 委員長をやらないでやるのが多いのではないですか。

——組合の役員から議員になるというのが。

橋村 ええ、ええ。委員長をやって、なったというのはいかな。初期のころだろう。

——いや、総評の最後のころになってからそうなった。

——及川一夫（1929～2009年、全電通委員長等を歴任）さんとか。

橋村 及川さん、そう言えばあの前に委員長をやっていたな。

——いま言われた阪神・淡路大震災の説があるわけですね。あれがなければ、民主・リベラル新党結成がうまくいって違った状況が生まれたのではないかと。ところがその日に、離党届を出そうとしたそのタイミングで地震が起きてしまっ、それどころではなくって、結局山花さんを中心とする新党結成運動はタイミングを逸して挫折してしまった。それはどうなんですか。あれがなかったらうまくいったと言えますか。

橋村 それを推進していたグループはそう言うと思います。

——かなり熟していた？

橋村 そうだと思いますが……。社会党の新党結成の第1回準備会が1995年11月10日に開かれています。その時には弁護士の五百蔵洋一さん、社会党の上原康助さん、岡崎トミ子さん、五島正規、田中昭一さん、千葉景子さんという人たちが入っています。この時に丸山照雄さんという、宗教評論家ということになっていますが、この人が準備会の会長になっていまして、こんなので本当にできるのかというのが村山さんのグループの発想だったようです。その前に高野孟さん（1944年～、高野実〈1901～1974年、労働運動家〉の長男）も入っていましたが、準備会の中ではあの人が起草案みたいなものを書くことになっていたんです。長良川河口堰を野坂浩賢さん（1924～2004年、建設大臣等を歴任）が開けてしまったというので（1995年5月、野坂建設大臣が長良川河口堰の本格運用を開始する旨を発表した）……。そうしたら木曾三川の門がありますよね、水門を開けるか開けないかでずっともめていたやつを野坂さんが、建設大臣だったのか、それで開けてしまったものですから総スカンを食らって、な

んだ、あれは、いままでの運動はどうだったんだと。そのようなことで高野さんが抜けてしまって、その後はだれが書くんだというので、五百蔵さんは憲法論みたいなものを書いて持ってきたりしましたが。

社会党と連帯する労働組合会議をめぐる

——もう少し古い、歴史にかかわることですが、社会党と連帯する労働組合会議というのは、労働組合として組織決定のもとに社会党との連帯を強めていこうという趣旨ですよね。その前は、例えば60年代の社会党の活動として私どもの記憶に残っているのは社党協という、社会党員党友協議会というのを労働組合の中につくっていくというのが、労働組合の正統の、オーソドックスな活動として決定されていて、岩井章さんが総評事務局長時代、60年代に活発に各産業の中にそういう組織をつくり上げていく。このことが社会党を鍛え、また労働組合を鍛えていくのに非常に重要なんだと。こういう取り組みがなされていましたが、その取り組みはその後、60年代以降どういう経過をたどって衰退し、あるいはそういう方針が消えて、労働組合としての連帯関係をつくっていくという基本的な方向へ変わっていったのか。このあたりはどうなのでしょう。

橋村 あまり古いことはよく知りませんが、私どもの産別の中にも党員協というのは、党員党友協というのがありました。

——全国金属の中にも？

橋村 中にもありました。岩井章さん(1922～1997年、総評事務局長、議長を歴任)がどういう形で言ったかは別にしても、仲間うちみたいな形で共産党対策をやった時には、そういうのが集まっているいろいろな話をするというふうなことをやっていたようです。ゆるいものだったんです。党員協というのはどちらかというと、

これは内輪話になってしまってどこもそうだとはいませんが、組合の中では労働組合の人事問題などに触れるのが多かったのではないですか。党員協で決まらないとなかなか決まらないというような動きが、こんなことを言っているのかどうかわかりませんが、どこの産別にもあったのではないかという気がしています。

これがどういう形で衰退していったかということになると、党としてのそういうものに対するてこ入れはほとんどなかったんです。私自身の記憶でも、総評の副議長になったりしたこともあるが党員をもういっぺん復活なんて……。幽霊党員みたいな形ではいたけれど、何にも連絡がなかったのが、総評に組織局に飯田さんという人がいて、その人が全金の出身だったものですから、ちゃんと党費を取りにきていましたが、その人が辞めてしまったら、全金の本部が渋谷にあったものですから渋谷のほうに党籍を移したら、何にも言わないと思っていたところ、そのうち党首の投票権について、党費を納めていないから何年分、うん万円、払えって。こんなことをやられていたのではとてもじゃないけどと思って、1回だか何かまとめて払ったら、その後はそれっきり何にも言ってこなかったですね。だから、よほど組合のほうがりしてないかと続かなかったのではないですか。

党としてどうだったのかという点については、党の方が2人いますから聞いてもらったほうがいいと思います。組合関係では、組合の関係としてそういうことをしっかりやっているところ、党費まで納めているところは、それなりものをちゃんとやっていたと思います。したがって、全通などはそういうことをしっかりやっていたのではないですか。旧官公労系はその辺はしっかりやっていたと思います。党大会に代議員もちゃんと出てきていましたから。

これが衰退したかどうか、そういうところが

どうなったかは知りません。ただ、組合のほうとしては、産別としてこういう人を推薦したいと機関決定で候補者の推薦などは決めるものですから、そうするとずっと社会党ということであって、組織として社会党推薦を決めたということになっているだけで、必ずしも全員が黨員になったり党友になったりしていることとはちょっと違っていたのではないかと思います。

——先ほど役員対策的な面があったうんぬんというお話がありましたが、私どもが見ていたところではそうではなくて、例えば単産の中に大企業組合があって、その大企業組合を強化していくために、大企業組合の中に黨員党友を組織することによって横の連携を強めて産業別組織、あるいは組合の運動を強めていこうと。岩井さんなどはとりわけ重厚産業のそういう労働組合の中に黨員グループをつくっていくということに非常に熱心だったということで、役員対策というのは……。

橋村 最初はそうなのではないですか。それがまとまってきてしまうと、どうするんだということになってくると、仲間うちから役員を出していこうというような話になっていったのではないかと思います。先ほど同盟の、友愛会議の政治方針みたいなものを読み上げさせてもらいましたが、その中でも各単組に黨員を2%以上つくろうではないかということ運動として掲げています。総評も最初はそういう運動をずっと展開したと思います。

——同盟は民社党の拡大を組合方針として掲げていますが、総評はそこまでやらなかったのではないですか。

橋村 僕の記憶ではないですね。

——社会黨員を何%まで増やすという方針を僕は読んだことがないんだけど。同盟は読みましたよ。

北岡 総評の方針の中にそういうふう書い

たことはなかったと思います。そのことを推進していたのは総評レベルの社会党の黨員協です。それがもう少し形を整えようということで「社会党を支持し強める会」というのを、何年だったか覚えていませんが、総評を解散するかなり前に立ち上げましたが、それが運動的に成功したかどうかという、あまり成功していないと思います。

それ以上に黨員獲得という問題を別の視点にしてしまったのは、参議院の選挙制度が変わって比例区が拘束名簿方式になってからです。候補者を出す時に党のほうから何名出せと言ってくる。黨員党友の獲得によって順位を決めることになったので、黨員獲得運動というのはそのころは……。むしろ一般的な社会党の黨員をどうやって増やすかという以上に、選挙に直結して黨員拡大になっていったと僕は記憶しています。岩井さんの時分と総評解散の間には時間差が30年ありますから、同一の次元では論じられないと思いますが、少なくとも1980年代に入ってから以降、解散までの10年間ぐらいを考えると、岩井さんがおっしゃったような運動が真面目に取り組まれていたとは考えられないです。

ただ、候補者を出した単産はとにかく黨員党友を取らないかぎりだめなので、拘束名簿方式でやっている時には全然別の意味で必死だったと思います。そうやって名前を取られたのが黨員として、社会党でいうと最高の時にはたしか黨員数が13万だったか15万だったか、そのぐらいまでなったと思いますが、そうやって膨らんだ黨員が社会党の黨員としての義務を果たしたかという、かなり疑問です。そのへんは自民党の黨員とあまり変わらないと思います。本物の黨員と選挙用にとられた黨員との間には画然たる格差があっただろうと僕は思っています。正しいかどうかわかりませんが、そんな印

象です。

1990年代について

——細川政権が退陣して、その後、羽田政権ができます。「改新」という統一会派が後に新進党になりますが、労働戦線も民社党と社会党に政党が分かれてしまって社会党は離脱を表明します。「連帯する会」は社会党の政権離脱の決断を支持するという声明を出していますが、離脱にあたって「連帯する会」の中で意見の対立はあったのでしょうか。

橋村 ありました。一つに、いわゆる市一連合と言われるように、市川雄一（1935年～、公明党、新進党などで衆議院議員）さんと小沢一郎さんの関係があそこを牛耳っているようなことがあって、そこに民社党の大内啓伍さん（1930年～、民社党で衆議院議員）が絡んだりして、いろいろ画策したうえで社会党を抜くために改新というようなものをつくったんだと。連立7党1会派と言われていましたが、少なくとも与党の中では勢力的に一番大きいところがボイコットされるような関係については、社会党の中にもアレルギーみたいなものがあったと思うのです。それと同時にこっちのほうにもあったけれど、なぜ羽田から抜けたんだという反論はうちのほうにもありました。だけど、こんなふうにやられたんだと。現実的には大内がいろいろなことを言ったりやったりしたんだけど、実は裏で市一連合が糸を引いているのではないかというふうな話もありました。細かいことは忘れましたが。

その時はそれで済みましたが、そういうのがあったから、村山政権ができた時に組織内がバーンと噴いたんです。何だったんだ、おまえら、そういうことを知っていたのかと。知るわけがないんですけど。よけい噴いたというのはそこら辺からの伏線が中にあったと理解しても

らって結構です。

——その後、自社さ（自民党・社会党〈社民党〉・新党さきがけ）で連立政権ができる時に、自民党に呑み込まれてしまうのではないかという意見がありましたが、結果的に呑み込まれたのではないですか、どうですか。うまく利用されたように見えますが。

橋村 うーん、今になってみると、そうですね（笑）。でも、政権を取れば、もっといろいろなことをやってもらえるのではないかという期待感が強かったんです。村山政権から橋本政権に移った時も、確か久保さんが大蔵大臣になったでしょう。久保さんが行くんだったら、いちばんの元凶の大蔵省の中でしっかり鉈を振ってもらえるのではないかという期待が大きかったですね。ところが結果は、官僚もびっくりするぐらい官僚的だったということの後で噂で聞きましたが、その辺はよくわかりませんけども。だから、あの時も結果はそんなに出なかったですよ。でも、あの二の舞を民主党もやっているようなものでしょう。ちょっと絞れば何百億だか何千億だか出てくるなんて言っていたのに、棚卸をやっても全然出てこなかったでしょう。

——先ほど結果的に総評が同盟に呑み込まれたというような質問もありましたが、総評センターから「連帯する会」になって、最終的に民主・リベラル労働組合会議に至る過程で、旧総評系の政治部門、総評センターなどは民主党の結成に際してある意味主導権を握れなかった、体系立っての参加、関与ができなかったと総括しているのでしょうか。社会党が主導権を握れなかったとともに「連帯する会」もそれに引きずられたと。

橋村 率直に言ってそうだと思います。「連帯する会」という形だったり、推進労組会議という形だったりしながら主立った人と話はいろ

いりました。その時に、我々はこんなふうに考えていて、新しいものをつくってもらいたい。7党1会派なんていう連合体ではなくて、一つの大きな塊をつくってもらいたい。そのためには、あそこはだめ、ここはだめという排除ではなくて、もっと呑み込んで大きなものをつくってもらいたいという申し入れはしました。だけど、これはやはり政治家の判断ですから……。

——そちらに呑み込まれたというか、引きずられた。

橋村 結果としてはそういうことになっています。

——社会党と民主党との関係でいうと、社会党自身で言うと、個人単位での参加が多かったわけですね。旧総評センター、「連帯する会」のほうはまとまりを保っていた。社会党のほう是三々五々分裂して民主党のほうに参加していったのとは逆に、まとまりを保っていた分、全体的に共倒れというのも何ですが、主導権を持たぬままに動いて行って、その後の、成立した後の民主党に関与するという形式になったと理解してよろしいですか。

橋村 成立した後の民主党との関係は、かつての社会党との関係とは全然違ったのではないかと思います。僕はその時には離れていましたので、わかりません。

——そのような薄い関係になったのも、民主党成立時の関与でできなかった、薄い関係だったことから結果的になっていった。

橋村 その辺は私の口から何とも言えません。

総評と同盟、新党再考

——社会党・総評と並び称されていたことから考えると興味深いことは、政治部門からすると、社会党のほうはバラけて行って民主党に関わっていったという印象が強いのに対して、本日のお話ですと、総評のほうはまとまりを保つ

ていた。三々五々分裂して民主党のほうに流れ込んでいったというような対象関係には全然ないということが、お話から見えてきて、その点は大変興味深く聞きました。同盟が存在するから、そことの対抗関係がもしかしたらあったのかもしれませんが。

橋村 同盟のほうはどちらかというと、どんな組合の会合に来ても社会党がまず挨拶して、その後、民社党が挨拶するというふうな関係が続いていました。民主党になったら民主党が第一党ということでバツと挨拶するようになって、わがほうがこうという感じだったのではないですか。いままでの屈折したのがこうなったような感じで。

——そのときに鳩菅新党が結成されて、社会党は三々五々入っていくわけですね。それを認めるわけですね。全部がなだれ込んでいくというような戦術は考えなかったのですか。あるいは、そのことを提言するというふうなことはされなかったのですか。みんな入ってしまえばいいじゃないかって。

橋村 みんな入ってしまえと言いましたけど、向こうが拒否だということです。村山さんと話した時はそういうことを……。それと、横路さんと話した時も全部受け入れてくれと話しましたが、その時は勢力としたら鳩菅のほうが強かったのではないですか。

——鳩菅のほうがなだれ込み戦術を受け入れないと。

橋村 そうです。

——でも、個々人でもって全員が入ってしまうということも、やろうとすればできたのではないですか。

橋村 向こうが受け入れなければだめなのではないですか。

——そうなると選別だということになるわけですか。

橋村 選別だということでもた違った動きが出てきたかもしれません。

——私は当時『社会新報』（社会党〈社民党〉の機関紙）をとっていましたが、社民党の最初の決定は全党一致して民主党に入党するという党決定をしていました。そうしたら鳩山が、村山はいらない。それ以外の人は受け入れるけれど、村山はいらないと言ったら社民党が怒ってしまった。おれたちをバカにしているのかと。って結局、全党一致方針をひっくり返してしまって、入りたいやつが入れと変わってしまったのです。

——村山さんだけ残して、みんな入ればよかったんです（笑）。

——村山さん以外にも、そういう古い人はいらないと。それで村山さん以外の幹部たちも、自分たちも入れないのではないかということ。

——あの時は武村正義さんも排除されたんですね。

橋村 武村さんも排除です。さきがけのほうも武村は排除すると。

——社会党が排除されずに、旧総評センター、「連帯する会」が完全に同調したのは今日から考えると逆に不思議な点でもあるなと。「連帯する会」はある意味恒久的な組織でないわけですから、後から考えると、いったん解散して各産別で個々が民主党系に参加する、関与するという形も、なだれ込み戦術というか、そういうものから採り入れられたのではないかと。

橋村 状況的に考えると、連合ができていたということが一つ大前提としてあるわけです。社会党がこんなになってしまったから、ここで解散だよと。これから改めて、民主党を支持するグループは民主党グループで塊をつくれ。あるいは社会党、いままでどおりやりたいやつはそうすればいいと。そういうふうにやったら両方バラバラになったと思います。そんなことで

下部まで話したら、いまさらなんだということになりかねないですから。

——連合のほうがある意味ごっちゃの状態になっている中で、政治部門においてもごっちゃになることが全体の崩壊というか、なだれを打って壊れてしまう危惧があったと。

橋村 だから解散総会をずらして、こっちの母体ができるというか、まとまるまで待ちながらという形です。それと同時に、総選挙の結果がどうなるかということも見ながらやらないということになってくると思います。

——ある程度の塊を持っていかないと逆にいうと組織が持たない。

橋村 組織も持たないし、影響力もないだろうしね。やはり選挙ですから。選挙の時にどれだけの力が発揮できるかという応援団でなければ、日常的に文句を言うけれど、選挙も何もやらないんだったら応援団にも何にもならないということで、向こうだって見放すでしょうし。

——社会党の個々人の議員のほうが身軽だったのかもしれない。それは興味深いお話です。

民社党との関連で

——社会党の政権離脱の時の話で大内啓伍さんのことが出てきました。これは社会党、総評と離れて同盟の話で、労働組合の委員長とかそういうレベルが社会党からはあまり出てこない。どちらかというとな社のほうが多かったと思います。昔にさかのぼると基政七（1903～1986年、民社党参議院議員）とか武藤武雄（1916～1978年、社会党衆議院議員、民社党から立候補した際は落選）とかあいう民社系の人たち。いわゆる委員長系の人たちが立候補してというのが結構多かった。そういう人たちは、自分たちの支持労組があるのでそこからつなぎ役、ブローカーと言ってはすごく変な話ですが、強かったような気がします。この離脱に

関しては同盟がかなり動いたのではないかと私はずっと思っていますが、どのように考えますか。民社が振り回していたのではないか。

——同盟が民社を振り回して社会党の離脱を引き出した。どうですか。

橋村 犬猿の仲だったわけですし、近親憎悪みたいな形になっていましたから、そこでいろいろな動きは出たと思います。だけど、それが友愛会、あるいは同盟、全体がそういう動きをしたとはちょっと考えられないです。

——一連のいろいろな会議をつくられて、労働組合と社会党との関係を維持しようとされました。これは連合結成という新しい状況のもとで、総評・社会党ブロックの政治的・社会的影響力の維持・拡大を何とか図っていこうという努力のそれぞれの表れだったと思いますが、結果的には失敗したと言ってよろしいでしょうか。失敗したとすれば、その主たる原因はどこにあったとお考えですか。

橋村 主たる原因は何かと言われると、失敗したかどうかという点もあれですが、話の中でも触れましたように、労働組合の運動は政治運動が主ではありません。労働条件の関係が主になります。そちらの運動や活動がそっくり連合に移って、残されたのが政党との関係だけになった時に、組合としての、組織としての求心力をどれだけ持ち続けられるのか。社会党がそのことをどれだけ真摯に受け止めたか。このこととの関係になってくると思います。

いままでと同じような感覚でずっと見ていられるとすれば、やってくれるはずだと社会党のほうは見たかもしれませんが、受け止めるほうは、そんな無理難題を言われたってもうだめだと。そういうことになってしまうと、それならばもうやめようかということにもなりかねない。そこで先ほどから言っているように、党自

身が脱皮しようということに対して我々も同調しながら、そのためにそういう関係についてもしっかりやっていこう。あるいは、社会保障の問題がこれから大きくクローズアップされてくるだろうから、その時に政治との関係をしっかり持っていないことには、我々の生活そのものをよくしていくことにもなっていないのではないか。このような問題も含めて政党との支持・協力関係をどうやってつくっていこうかということで対応してきたつもりですが、受け止める側がそこまで受け止めきれていなかったのではないかというのが私の正直な気持ちです。

——総評がなくなって、連合が結成されて、労働組合と社会党とのあり方なり関係の仕方が変化した。その関係をめぐる条件が変わったにもかかわらず、社会党はそれに対応する能力を欠いていたということでしょうか。

橋村 だから、言わなければよかったのです。

——言わなければ？

橋村 いろいろな、93宣言（1993年に作成された綱領的文書。党大会での採択は見送られた）、95宣言（1995年に作成された「95年宣言—新しい価値と政策目標」。採択された）、新党づくりとか言わなければ、それはそれなりのこっちの対応の仕方があるけれど、言ったから乗ったわけで、それが「連帯する会」解散につながっていったわけです。個人的には、端的に言わせていただければ、言ったとおりやってくれなかったという恨みもありますよ。

——大変端的な結論が出たところで時間になりました。

橋村 勝手なことを申し上げまして失礼しました。

——興味深い話を聞かせていただきまして、どうもありがとうございました。